

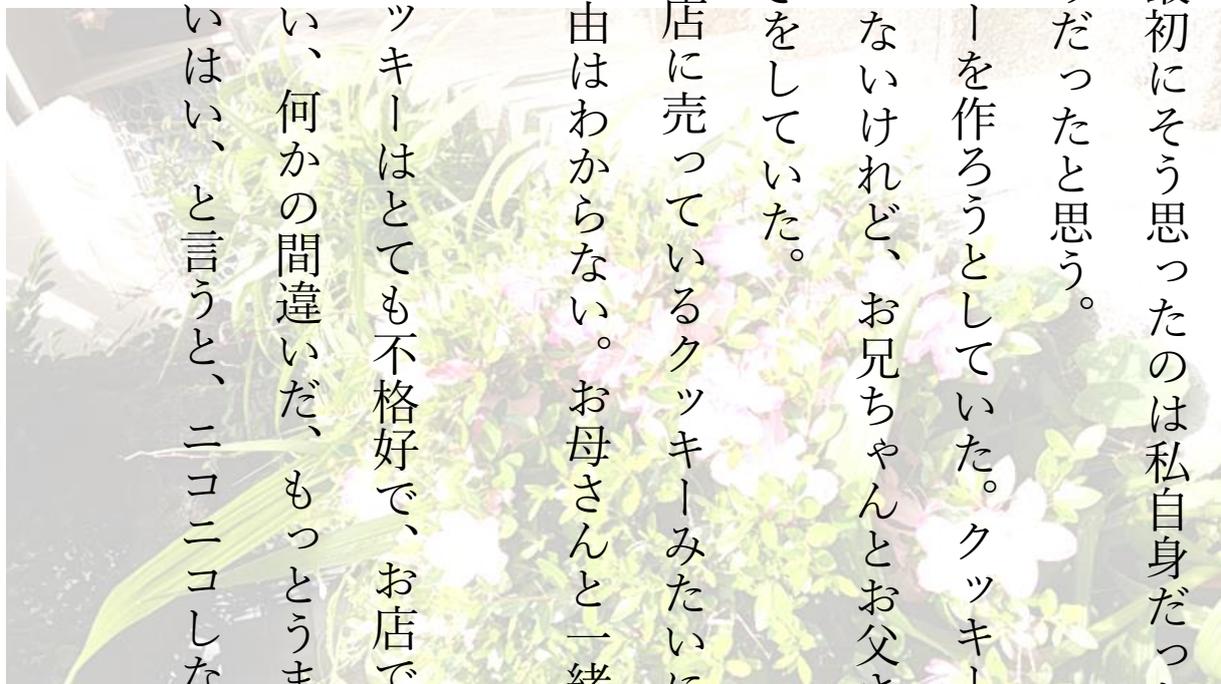
一人では何もできない。最初にそう思ったのは私自身だった。

幼いころの失敗がきっかけだったと思う。

私は母を手伝って、クッキーを作ろうとしていた。クッキーを作るのは初めてで、なぜ作ることになったのか覚えていないけれど、お兄ちゃんとお父さん、喜んでくれるかな、と言いながら、クッキーの型抜きをしていた。

初めてにもかかわらず、お店に売っているクッキーみたいに、とても素敵で美味しそうなものになると思っていた。理由はわからない。お母さんと一緒に作っているから、というのが根拠だったかもしれない。

当然ながら、私が作ったクッキーはとても不格好で、お店で売れるようなものではなかった。でも私は、そんなはずない、何かの間違いだ、もっとうまくできるはずだったのに、と母に訴えた。母は笑って、はいはい、と言うと、ニコニコしながら山盛りのクッキーを父と兄のところへ持っていく。



——やめて、二人に食べさせないで！

叫ぼうとしたけど、なぜだか声が出なかった。私は顔をそむけ、逃げるようにして自室のベッドにもぐりこんだ。

もつとうまくできるはずだったのに——。そう思ったら涙が出てきて、頭から布団をかぶったまま、声を押し殺して泣いた。

そのとき作ったクッキーを、父と兄がちゃんと食べたのか、食べたとしたら美味しかったのか、それともまずかったのか。感想を聞いた覚えがない。私が忘れているだけなのかもしれない。あるいは、あまりにもまずくて、誰も何も言わないようにしていたのかも……。本当のところは何もわからない。

それからしばらくは、機会があればもう一度クッキーを作って、父と兄に美味しいと言ってほしいと思っていた。その気持ちが無くなったのは、いつからだっただか。今、お菓子は作っていないし、作ろうとも思わない。

お菓子でなくても、何かを作るなんて私にはできない。何かを作るのが趣味という人は、きっと失敗したことがないんだと思う。そういう人に出会っても、親しくならないようにしている。私とは違う人種なのだから。

でもそうやって決めつけることで、気が合う人との出会いを逃しているかもしれない。大学に入ってから、そう思うことが増えた。私だって、気が合う人と過ごしたい。でもどうしたら出会えるのかわからない。そんな人、本当はいないのかもしれない。

それなら一人で過ごせばいい。そう思うこともあるけど、一人は心細いから嫌だ。

「一人にならなくてすむ」ためだけに、一緒に過ごす人たちがいる。でも気が合うわけではないから、だんだん息苦しさを感じるようになった。だから何かと理由をつけて彼女たちと会うのを避け、図書館で一人、ぼんやり考え事をする毎日。

もし声をかけられたらと、教科書を机の上に出しておくのだけれど、そんなアリバイ作りのようなことをするのも、もううんざり。

誰に何と思われてもいい。彼女たちから離れ、一人でやりたいことをして過ごせばいい。

そうは思っても、行動に移すのはまだ無理。一人になる、と宣言するのも無理だ。

いつか、胸を張って私はこれに人生のすべてを賭ける、誰に何と言われても自分の道を行く、なんて言える日が来るといいのだけど……今の段階では、そんな日が来るとはとても思えない。

それでも、希望は捨てずにいたい。本当にいつか、そんな日が来るのだと信じて。

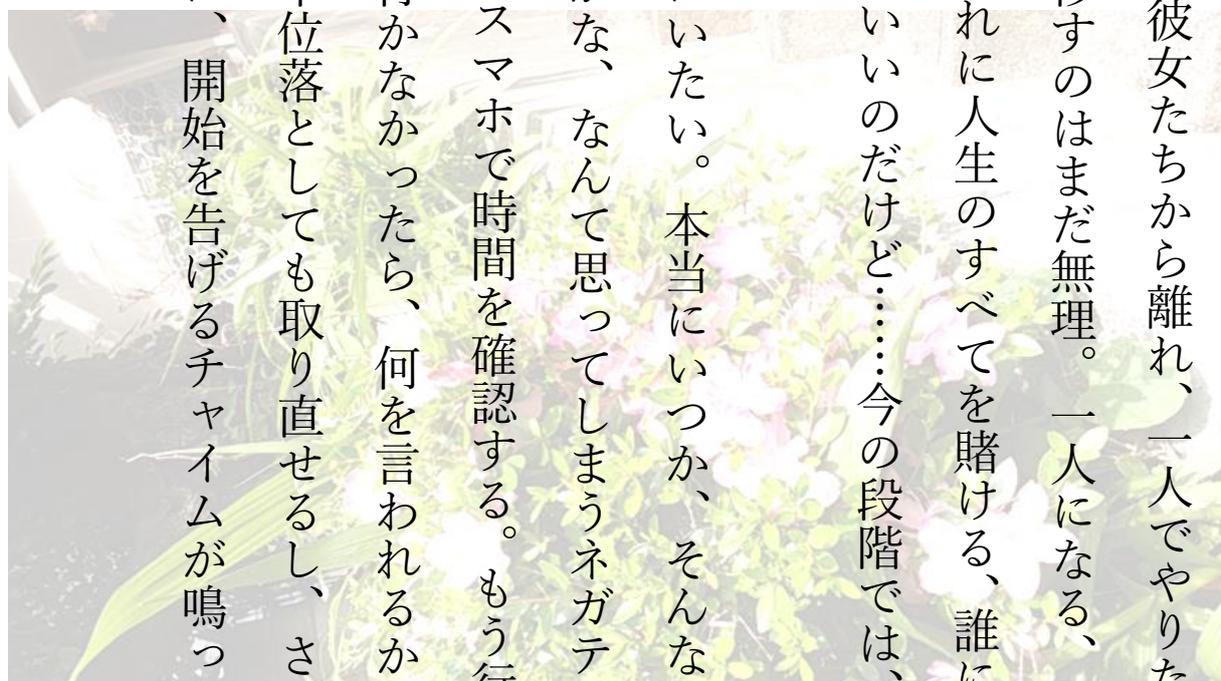
でも本当に信じていいのかな、なんて思ってしまいうネガティブな私。

もう、ため息しか出ない。スマホで時間を確認する。もう行かないと。あの人たちの顔は見たくないけど仕方がない。行かなかったら、何を言われるか……。

でも行きたくないなあ。単位落としても取り直せるし、さぼっちゃおうかな……。

ぐずぐず考えているうちに、開始を告げるチャイムが鳴った。

ああ、やっちゃった……。



私は机の上に突っ伏した。

どのくらいの時間、そのままでもいただろう。気がつくとき、窓の外は薄暗くなっている。帰らなきゃ。

一人暮らしだから、待っている人なんていないけど。それに加え、授業をさぼってしまったという罪の意識と、彼女たちに出くわしたらどうしようという不安とで、身体が異常に重く感じられた。

どこかで時間つぶしていこうかな……。

重い身体を引きずるように図書館を出た私は、門までの道をできるだけゆっくり歩いた。もちろん、授業が行われていた建物は避け、講師とも学生とも顔を合わせなくてすむよう、うつむいたまま歩く。誰かにぶつかりそうになるたび、スピードをゆるめ、やっと門までたどり着いた。

ホッと一息ついて、駅の反対側へ向かう。少しでも遠回りをしたい。その気持ちからだっ

たけど、新しく別路線の駅もできたので、そこで乗るほうがいいかもしれない。そう思った
ら、足取りが軽くなった。我ながら現金なものだ。

すっかり気持ちが晴れたので、顔を上げて歩く。すぐに不動産屋の看板が目に入った。

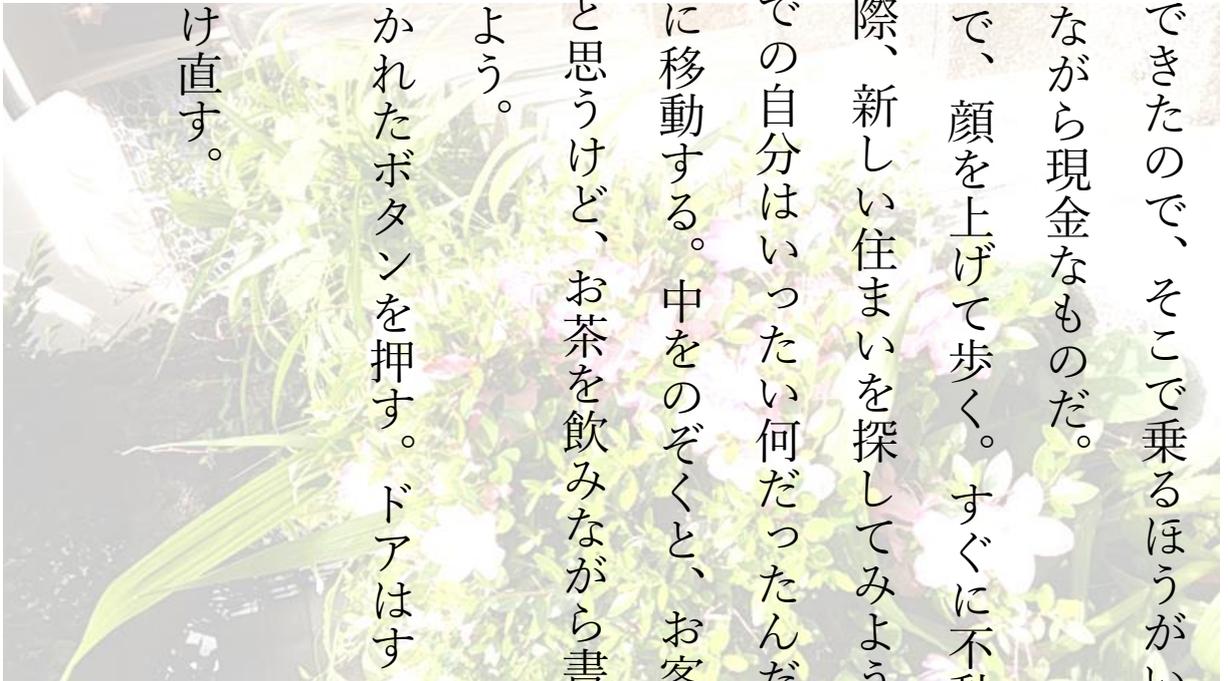
そろそろ更新時期だ。この際、新しい住まいを探してみようかな。そんなことを考えた自
分に、思わず苦笑した。今までの自分はいったい何だったんだろう。足取りもさらに軽くな
り、不動産屋の前まで小走りに移動する。中をのぞくと、お客さんは誰もいない。眼鏡をか
けた男性が、不動産屋の人だと思うけど、お茶を飲みながら書類に目を通しているようだっ
た。せっかくだから寄ってみよう。

ドアの前に立ち、自動と書かれたボタンを押す。ドアはすっと開いた。

「こんにちは」

男性が顔を上げ、眼鏡をかけ直す。

「やあ、いらっしやい」



おだやかな、やわらかい笑顔。緊張が少し解けた気がして、歩を進める。背後でドアがすとんと閉まった。

「あの、アパートを探しているんですが。住んでいるところが更新時期で、でも少し遠いので、この辺にいい物件があればと思って」

男性は眼鏡をとって、私の顔をまじまじと見た。

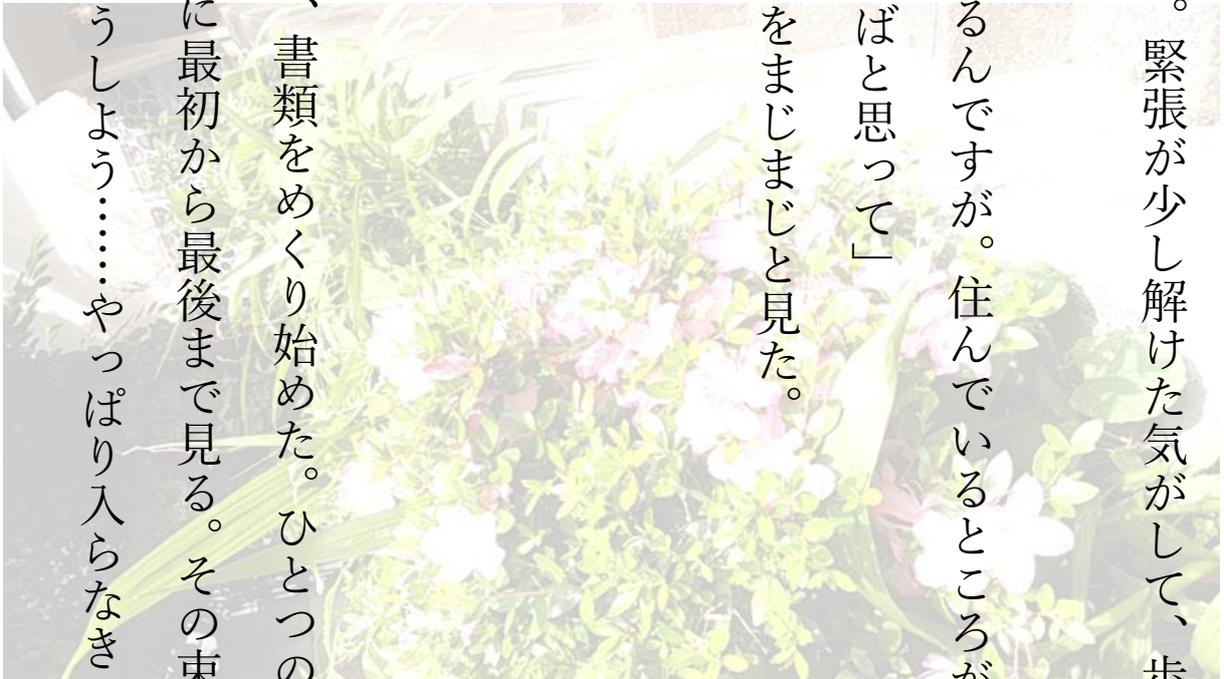
「学生さん？」

「あ、はい」

「そのの大学？」

「そうです」

なるほど、と男性は言っ、書類をめくり始めた。ひとつの束を最初から最後まで見て、別の束を手に取り、同じように最初から最後まで見る。その束にもいい物件がなかったのか、また別の束を手を取った。どうしよう……やっぱり入らなきゃよかったかな……。



「お、あった」

書類の束を持ち上げ、私のほうに見せる。

「ここなんか、どうですかね」

よく見えないので、男性のところまで移動する。と、座るよう促され、腰かけると、さっそく書類を見せられた。

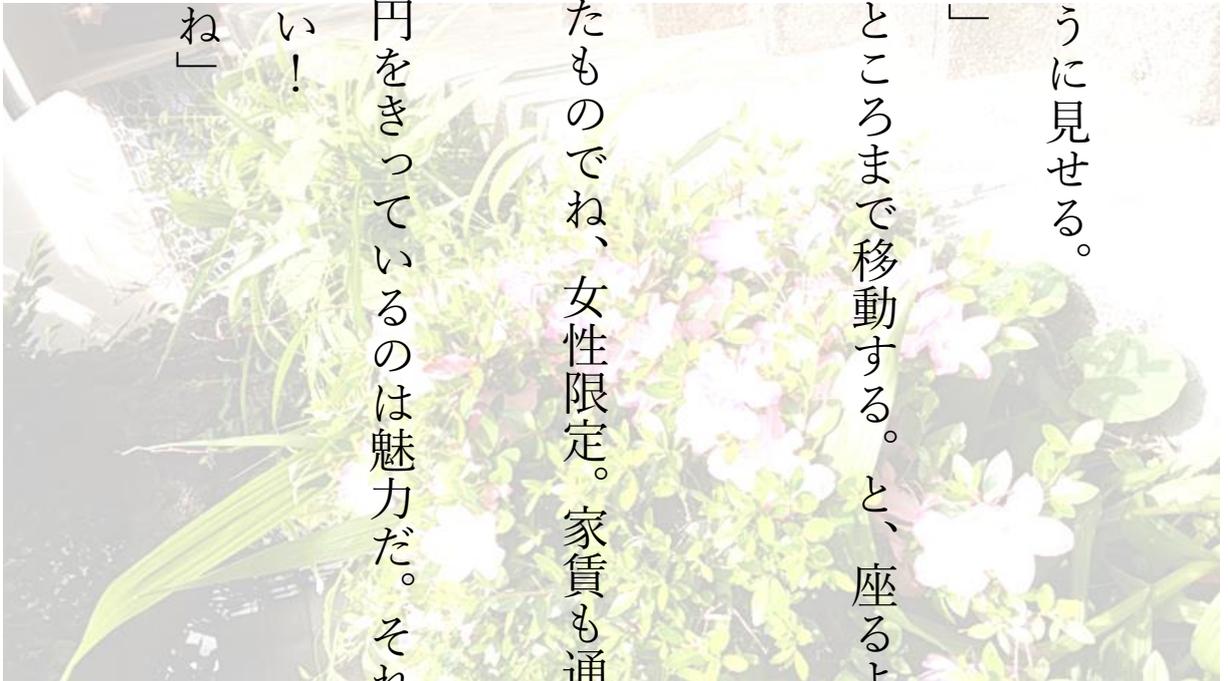
「シェアハウス……？」

「そうです。一軒家を改装したものでね、女性限定。家賃も通常のアパートと比べたらかなり安いですよ」

たしかに、この広さで五万円をきっているのは魅力だ。それに、水道光熱費を含めた「共益費」も定額負担。すごく良い！

「ただ、注意点がありましたね」

「何でしょう」



「ここに書いてあるんですが」

指された個所には、掃除は入居者が交代で行うこと、とあった。

「えっ、個室だけじゃなくて、ですか？」

「そうなんです。管理人は常駐していないので、オーナーさんが来て掃除をしたとしても、毎日来られるとは限りませんから、来ないときの掃除はしてほしいということなんです」
ほかの人と一緒に掃除するなんて……、まるで――。

「学校みたい、ですよね」

その言葉に思わずうなずいた。

中学のとき、掃除の時間が嫌いだった。いつも私一人で掃除をしていて、ごみを捨てに行くのも先生に報告するのもいつも私。最初は先生も注意してくれてたけど、だんだん何も言わなくなった。自分も掃除せずにいれば、状況は変わったのかもしれない。

私ばかりやるのは不公平、みんなちゃんと掃除して、と主張すればよかったのだろう。で

も、そんな当たり前のことも言えなかったし、とにかく掃除をしないでいるのが嫌で、一人でもやってしまうので、余計にみんな、私に任せておけばいい、と思ったのかもしれない。

今回も同じことになったりしないだろうか。うまくやっていけるかな……。

「やっぱり、掃除するのは嫌いですか」

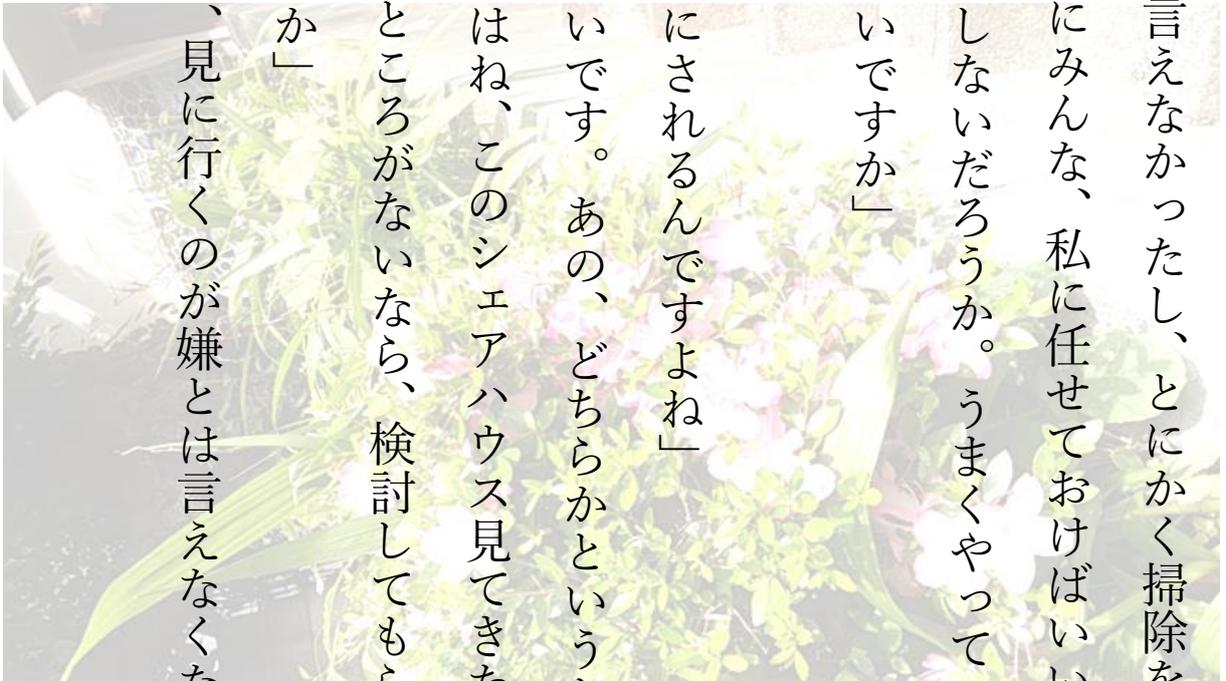
「えっ」

「皆さんこの項目を意外に気にされるんですよね」

「いえ、私はそこまでではないです。あの、どちらかというところ——」

「それはよかった！ いや実はね、このシェアハウス見てきたんですけど、すごくいい物件なんですよ。だからもし嫌なところがないなら、検討してもらえませんか。何なら、このあと案内しますけどいかがですか」

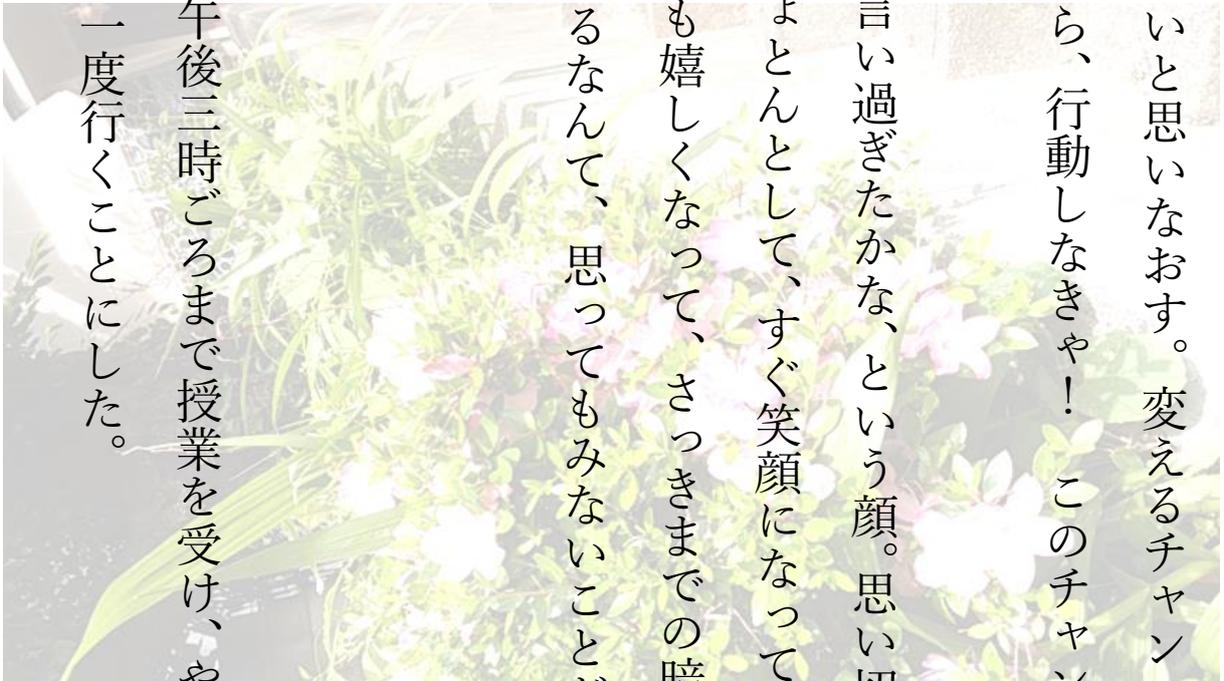
すごい勢いで畳みかけられ、見に行くのが嫌とは言えなくなった。早く帰って課題をやるうと思ったのに——。



でも、チャンスかもしれないと思いなおす。変えるチャンス。気が合う人と出会いたいなら、行動しなきゃ！このチャンスのをがしたら、本当に何も変えられない。

不動産屋さんは、ちよつと言い過ぎたかな、という顔。思い切って、ぜひ見学したいです、と言ってみた。すると一瞬きよんとして、すぐ笑顔になって、「ありがとうございます！」と立ち上がる。その様子に私も嬉しくなって、さっきまでの暗い気持ちはどこへやら。こんなに晴れやかな気持ちになれるなんて、思ってもみないことだった。

翌日は快晴だった。朝から午後三時ごろまで授業を受け、やっと解放された私は、昨日案内されたシェアハウスにもう一度行くことにした。



すでに入居している人とは話せたのだけど、オーナーさんは不在だった。その人によれば、明日（つまり今日）ならオーナーさんも来るということだったので、再訪することにしたのだ。

外観も素敵で、全体的に周囲の建物とも馴染んでいたし、ぜひ住みたいと思ったのだけど、やはりオーナーさんと話してみたかった。すでに入居している人は奈美さんといって、短期のつもりで入ったけど、居心地がよくて、もう一年以上いるのだという。昨日は中をちゃんと見られなかったもので、今日、オーナーさんと一緒にあちこち見てまわるつもり。このあとのことを考えたら、自然と足取りが軽くなる。

講堂のさらに奥まったところにある建物を出て、講堂の前を通る。と、同じグループの三人が講堂から出てくるのが見えた。しまった、と思ったけどもう遅い。中の一人が目ざとく私を見つけ、ほかの二人に知らせる。間違いなく、昨日のことを言ってくるはず。

講堂の前を通ろうとしたとき、三人が立ちはだかる。小さくため息をついた。こういう人

たちだから、一緒にいたくないって思ったんだよね。

覚悟を決め、三人を正面から見ると、彼女たちはちよつとひるんだけど、負けじと私をにらみながら、昨日のことを咎めてきた。

「なんで昨日来なかったのよ。ランチのとき何も言っていなかったじゃん」

「そうよ、ずっと待ってたんだから」

また小さくため息をつく。私のことなんて気にせず、授業に集中してたらいいじゃない。

「ちよつと何、さっきからため息ついて。どういうつもり？」

三人目の彼女はこのグループの事実上のボスで、ほかの二人は一步下がりで、彼女に場所をゆずる。向かい合う私たちの両側を、何事かと興味深そうにちらちら見ながら、学生たちが通っていった。

相変わらずだな、マキちゃん。人の注目を浴びることにかけては、中学のときから右に出る者はいない。私がこのグループに入ったのも、彼女の誘い、ううん、命令を断れなかった

から。

「何とか言いなさいよ。ゆかり！」

マキちゃんが私の名前を呼ぶのは、本当に怒っているときか、何かやらせたいとき。この場合、怒っているのかな、やっぱり。

「そんなに怒るようなこと？ 昨日はちよつと体調がよくなかったの。ランチのときは平

気だったんだけど、あとからお腹が痛くなって。図書館で突っ伏してた」

「お腹痛いなら、医務室に行ったらよかったじゃない」

「図書館に行ったあと、痛くなったの。図書館から医務室、遠いでしょ。だからじつとして、良くなったらいいなと思ってた。でも良くならなかつたから帰つたの。それだけ」

マキちゃんはまだ私をにらんでる。昨日までの私なら、きつと委縮してた。でも今は違う。

私の様子がいつもと違うことに気づいたのか、マキちゃんは私の前からどいてくれた。残る二人は、驚いてマキちゃんを見る。え、なんで、とかなんとか、ゴニョゴニョ言ってるみ

ただけど、うるさいよ、と一喝されて終わり。

しゅんとしてる様子はちよつとかわいそうな気もするけど、マキちゃんの言いなりなんだから仕方ない。私も、そっち側だったわけだし、胸がちくつと痛んだけど。

「ありがとう、マキちゃん」

動揺するマキちゃんを置き去りにして、私はキャンパスを歩く。まっすぐ前だけ見て歩くのが、こんなに気持ちいいなんて知らなかった。

振り返ると、マキちゃんがほかの二人に詰め寄られてる。珍しいな。あんなマキちゃん見るの初めてかも。駅に着いて、地下鉄のホームへと階段を下りる。

下りながら、そうだ、と思い出す。中学のとき、マキちゃんに話しかけられたんだ。入学式のあとだったかな。午後に何かあったんだけど、その日は給食がなくて、みんなお弁当持参だった。教室に出席番号順で座り、席の近い人同士でお弁当を食べた。

話しかけられたのは、あらかた食べ終わってから。ねえねえ、お菓子作るの好き？って。

子供のころ失敗したけど、嫌いになったわけじゃないから、うん、とうなずいた。そうしたらマキちゃん、私も好きなんだ、これ作ってきたの、よかったら食べて、って言いながら、小さな袋を差し出した。中には小さな貝の形のマドレーヌが三つ。とても形のいいマドレーヌ。食べなくてもわかった。こんなの、美味しいにきまつてる。私は、お菓子作りが好きだと言ったことを後悔した。

たぶんそのときの様子を見て、マキちゃんは勝ったと思ったんだ。掃除の時間、私だけが掃除してたのも、マキちゃんに言われたから。ううん、実際には言われなかったかもしれない。私が勝手にそう解釈したのかも。

でもマキちゃんに当番代わるよって言ったたら、マキちゃん、すぐくうれしそうな顔をした。そのうち、ゆかりが代わってくれるよ、とかってみんなに言いふらしたんじゃないかな。詳しいことは覚えてないけど、いつの間にか、掃除は私の担当みたいになってしまった。三年のとき突然担任が代わり、それでやっと解放された。

中三の三学期はマキちゃん、ほとんど学校に来なくて、どこの高校を受けるつもりなのか、私と同じ高校なのか、気になって仕方なかった。でもどうやら違う高校に行くらしいと知り、ホッと胸をなで下ろしたのを覚えている。

ホームに電車が入ってきた。風に髪がなびく。ドアが開いて乗り込んだ。平日の午後だからか、乗客はまばらだ。シェアハウスの最寄り駅までは三十分。腰を下ろし、目を閉じて昨日のことを思い出す。

奈美さんと話すの、すごく楽しかったな。帰りぎわ、私が明日も来ますと言ったら、不動産屋さんはちよっと驚いた様子だったけど、すぐに笑顔でうなずいた。問題なければ契約しよう。思わず身震いした。もうすぐ、シェアハウスでの新生活が始まる……。

高校ではマキちゃんのいない生活がうれしくて、入学式が終わるや、周りの人に話しかけた。それまでの私には、絶対にできなかったことだ。高校三年間は、本当にのびのびできたと思う。のびのびしすぎて、卒業がちよっと危なかった。

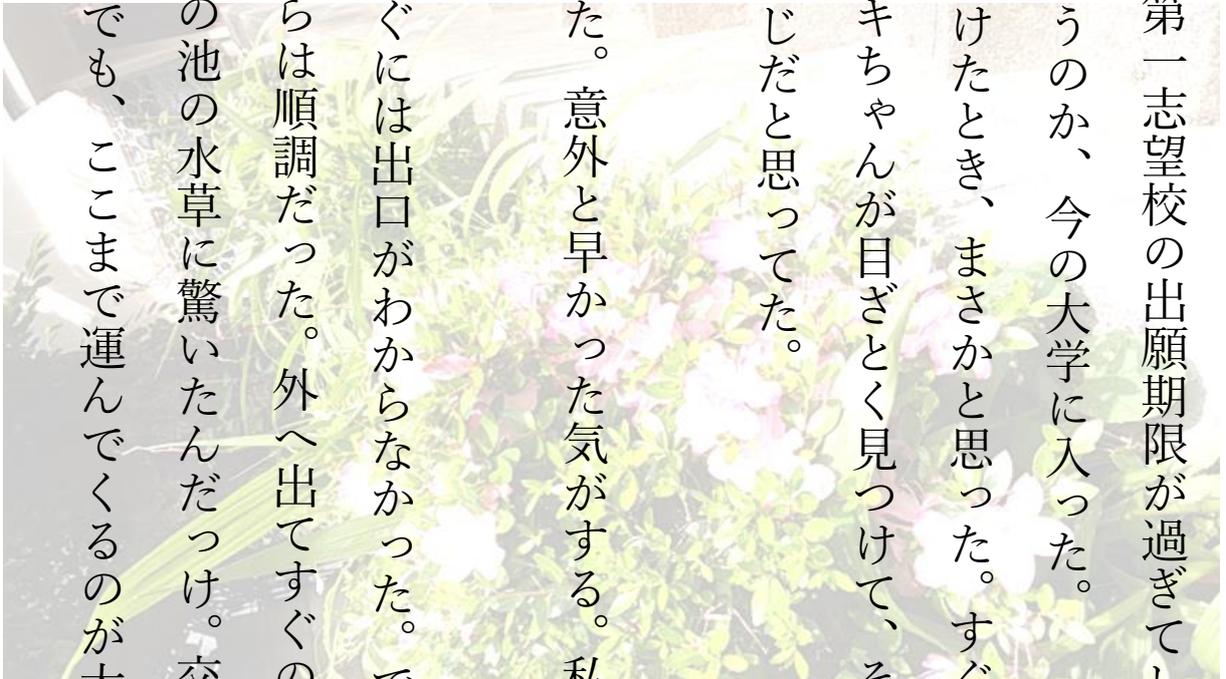
大学も、ぼーっとしてたら第一志望校の出願期限が過ぎてしまい、その時点でまだ間に合うところを受験。無事、というのか、今の大学に入った。

入学式でマキちゃんを見かけたとき、まさかと思った。すぐに立ち去ろうとしたけど、運悪く見つかって、というかマキちゃんが目ざとく見つけて、そこからは中学時代と同じ。それが一年続いて、二年目も同じだと思ってた。

でも――。

駅名が告げられ、目を開けた。意外と早かった気がする。私は立ち上がり、ホームに降りて左右を見回した。

昨日来たばかりなのに、すぐには出口がわからなかった。でも歩き出したら、あ、こっちだった、と思い出し、そこからは順調だった。外へ出てすぐの公園を間近に見て、また声を上げそうになる。昨日も、この池の水草に驚いたんだっけ。交差点のほうへ歩いていく。昨日も見たコインランドリー。でも、ここまで運んでくるのが大変かも。誰か、車出してくれ



たりするかな？

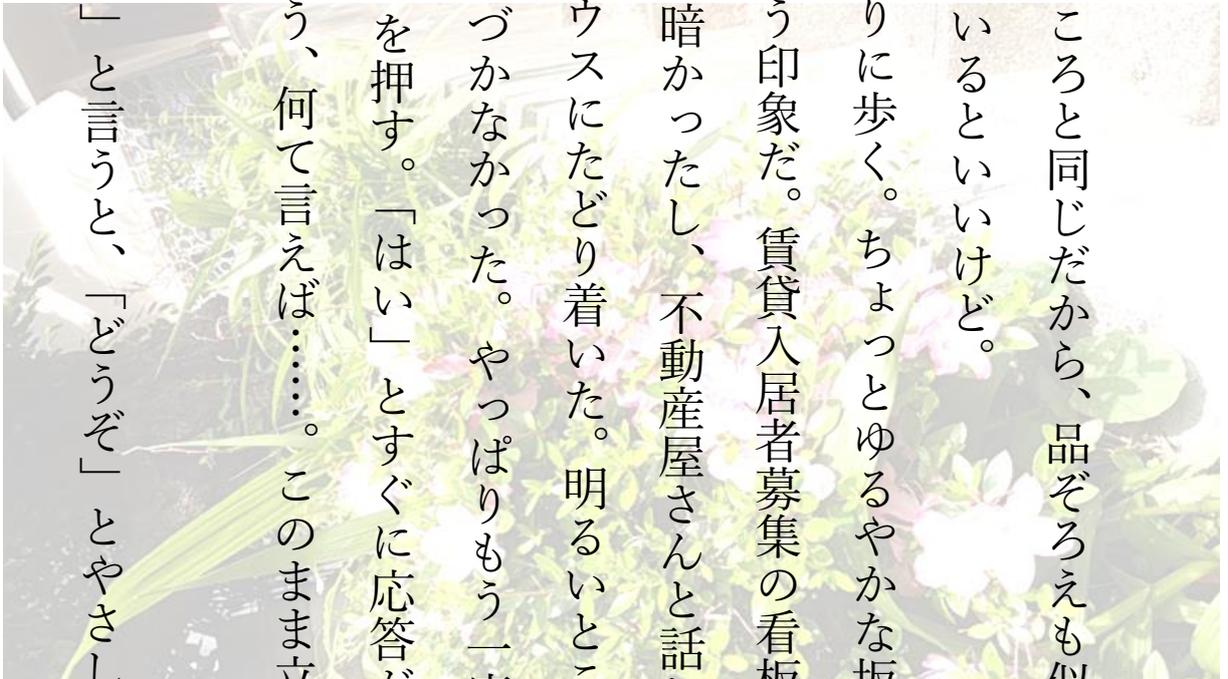
スーパーは今住んでいるところと同じだから、品ぞろえも似たようなものだろう。私の好きな商品が、たくさん売っているといいけど。

信号を渡り、しばらく道なりに歩く。ちよつとゆるやかな坂になっていて、しばらく行くとまた坂。起伏の多い街という印象だ。賃貸入居者募集の看板があちこちに出ている。昨日は気づかなかった。ちよつと暗かったし、不動産屋さんと話しながら歩いたせいかも。

しばらく歩いて、シェアハウスにたどり着いた。明るいところで見ると、お花がたくさん咲いている。これも昨日は気づかなかった。やっぱりもう一度来てよかった！

門のところでインターホンを押す。「はい」とすぐに応答があった。奈美さんじゃない。とたんに緊張した。どうしよう、何て言えば……。このまま立ち去りたい気持ちを抑え、ゆっくり深呼吸をする。

「昨日お邪魔した、立花です」と言うと、「どうぞ」とやさしい声がして、階段の上のドア



が開いた。それを見て、またドキドキしてくる。どうしよう、怖い人だったら……。そんなことを思いながら階段をのぼる。迎えてくれたのは、笑顔の素敵な女性だった。

「はじめまして、大川です。昨日は不在でごめんなさいね」

「いえ、とんでもないです、急にお邪魔してしまつて」

「立ち話もなんですから、どうぞ、入つて」

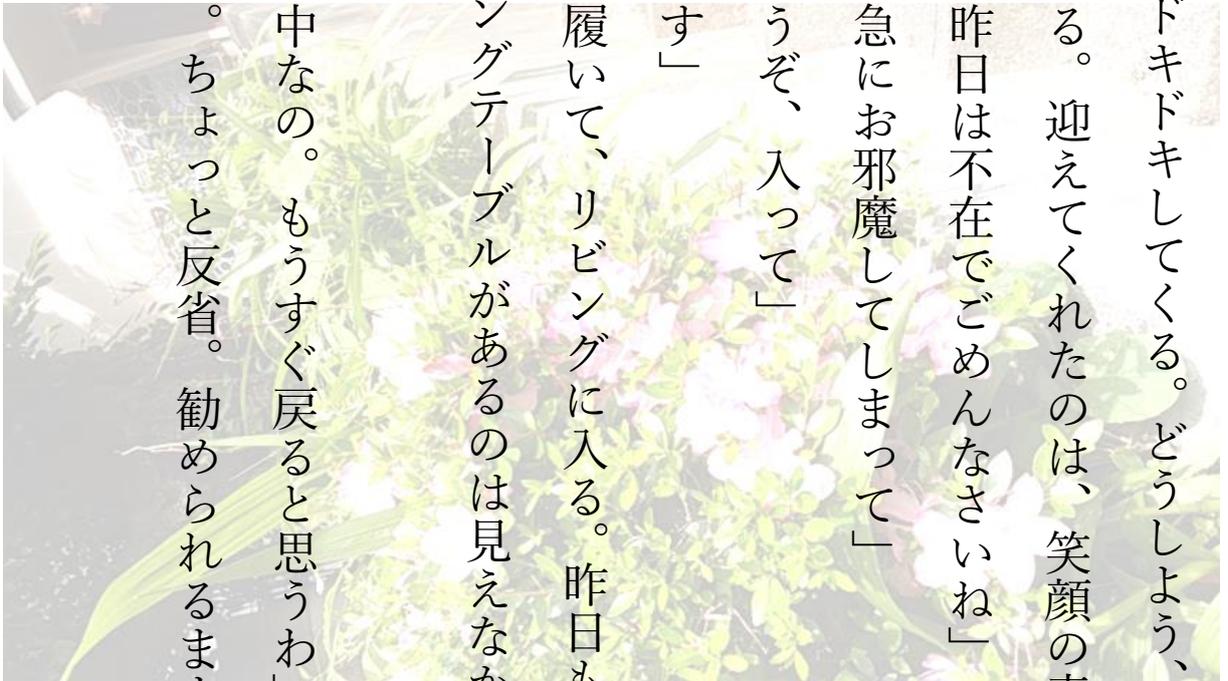
「はい、ありがとうございます」

出してもらつたスリッパを履いて、リビングに入る。昨日も入つた。奈美さんと話したとき。でも、向こう側にダイニングテーブルがあるのは見えなかった。奈美さんは、今日はいないのかな……。ないのかな……。

「奈美さんね、お仕事で外出中なの。もうすぐ戻ると思うわ」

私、不安そうにしてたかな。ちよつと反省。勧められるまま、ソファア―に腰をおろす。

「麦茶でいいかしら？」



「あ、はい。あ、いえ、どうぞおかまいなく……」

大川さんはすぐに麦茶を持ってきてくれ、サイドテーブルに置いてくれた。

「ありがとうございます」

一礼して、ひと口飲むと、一気に飲みほしてしまった。やだ、こんなにのど渴いてたなんて。

「今日は日差しが強いから、暑かったかもしれないわね。お代わり、どうぞ」

グラスをもう一つ渡されて、口をつけたらまた、半分くらい飲んでしまった。大川さんはニコニコしながら私の様子を見ている。どうしよう、何を話したら……。

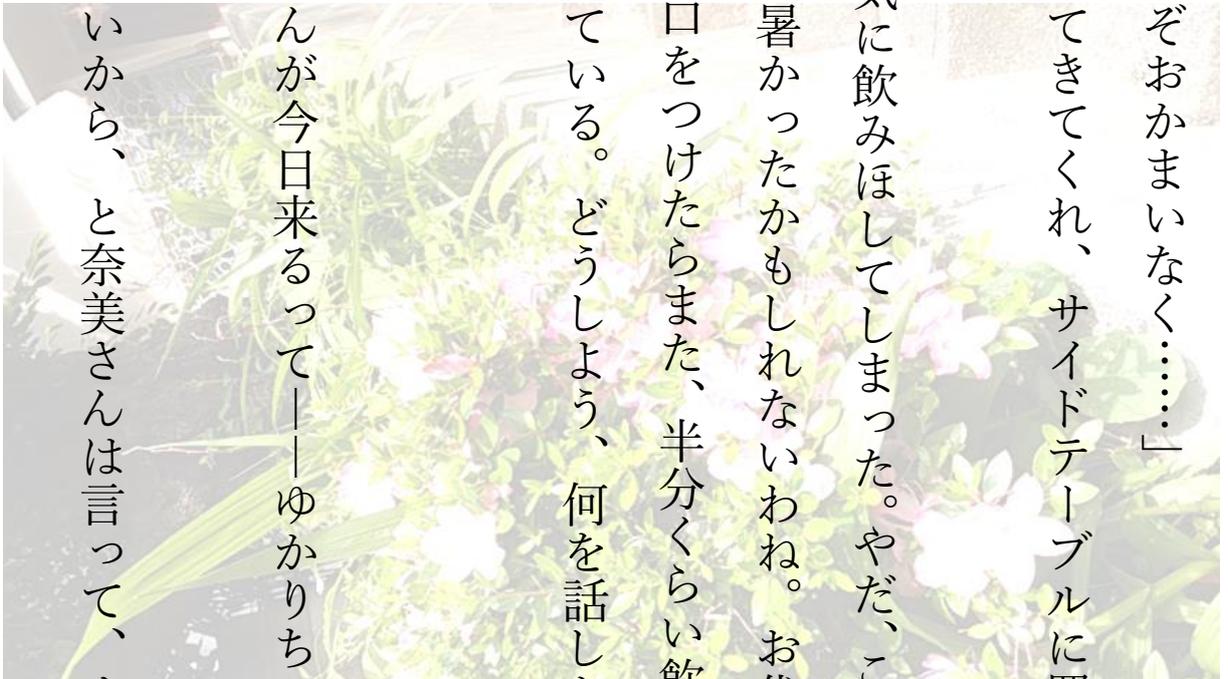
「ただいまあ」

ドアが開いて声がする。

「ねえ大川さん、ゆかりちゃんが今日来るって——ゆかりちゃん！」

「奈美さん——」

立ち上がろうとする私に、いいから、と奈美さんは言って、すぐ隣に腰を下ろした。



「あ、私も麦茶で！」

苦笑しながらも、大川さんは奈美さんの麦茶を持ってくる。なんか、いいな、こういう関係。

「ごめんね、何時に来るか聞いてなかったから、これでも急いで帰ってきたのよ」

「あの、お仕事だって聞いたんですけど」

「うん、そう。でも九時五時の仕事じゃなくて、ラジオの収録」

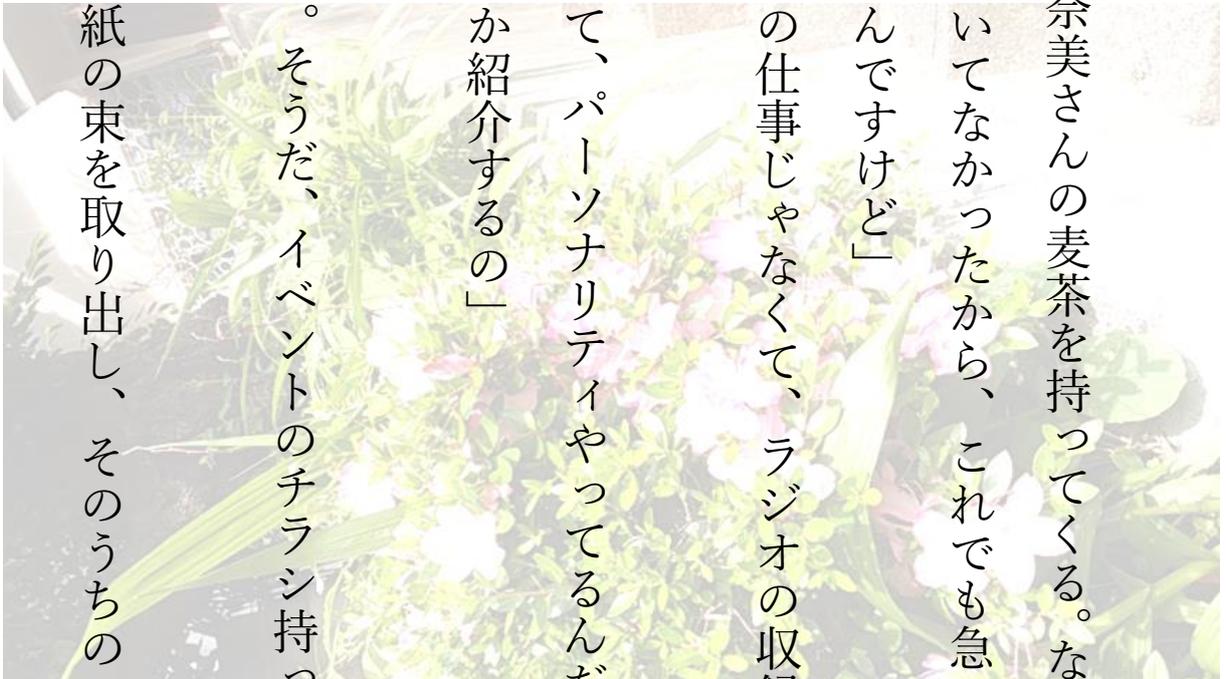
「ラジオ？」

「地元のエフエム局で頼まれて、パーソナリティやってるんだ。ローカル番組なんだけど、地元のお店とか、イベントとか紹介するの」

「へえ、面白そう」

「よかったら今度聴いてみて。そうだ、イベントのチラシ持ってたかも。そこに書いてあるから」

奈美さんはトートバッグから紙の束を取り出し、そのうちの一枚を私にくれた。



「あ、よかったらお友達にも。はい」

十枚くらいだろうか、同じチラシを差し出され、一瞬どうしようか考えたあと、受け取ることにした。友達と呼べる人がいないなんて、奈美さんには言えない。

「それで？ 話はどこまで進んだの？」

奈美さんが大川さんに尋ねる。

「進むも何も、まだ着いたばかりよ。ねえ、ゆかりちゃん」

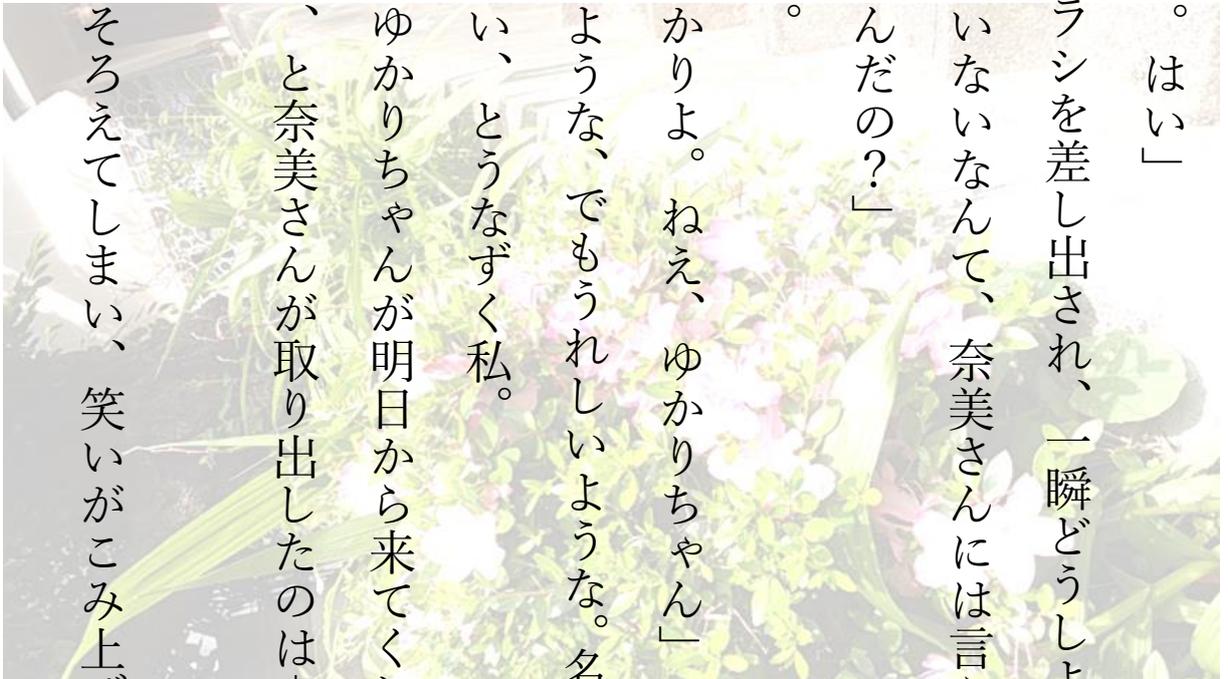
何だかちよつとくすぐったいような、でもうれしいような。名前を呼ばれてそんな気持ちになるのは久しぶりだった。はい、とうなずく私。

「なあんだ、私はてつきり、ゆかりちゃんが明日から来てくれるんだと思って」

こんなもの買ってきちゃった、と奈美さんが取り出したのは――。

「「クラッカー？」」

思わず大川さんと二人、声をそろえてしまい、笑いがこみ上げてきた。



「ちよつと奈美さん、なんでそんなもの——掃除が大変じゃない！」

「いいじゃない、私が掃除するから。あ、ゆかりちゃんもちよつとでいいから手伝って、ね」

お願い、と両手を合わせる奈美さんの様子がおかしくて、また笑いがこみ上げる。

いいじゃない、シェアハウス。毎日楽しそう！

ピンポン、とインターホンが鳴り、大川さんが立ち上がる。

「宅配便かも」と奈美さんが言う。

「宅配便？」

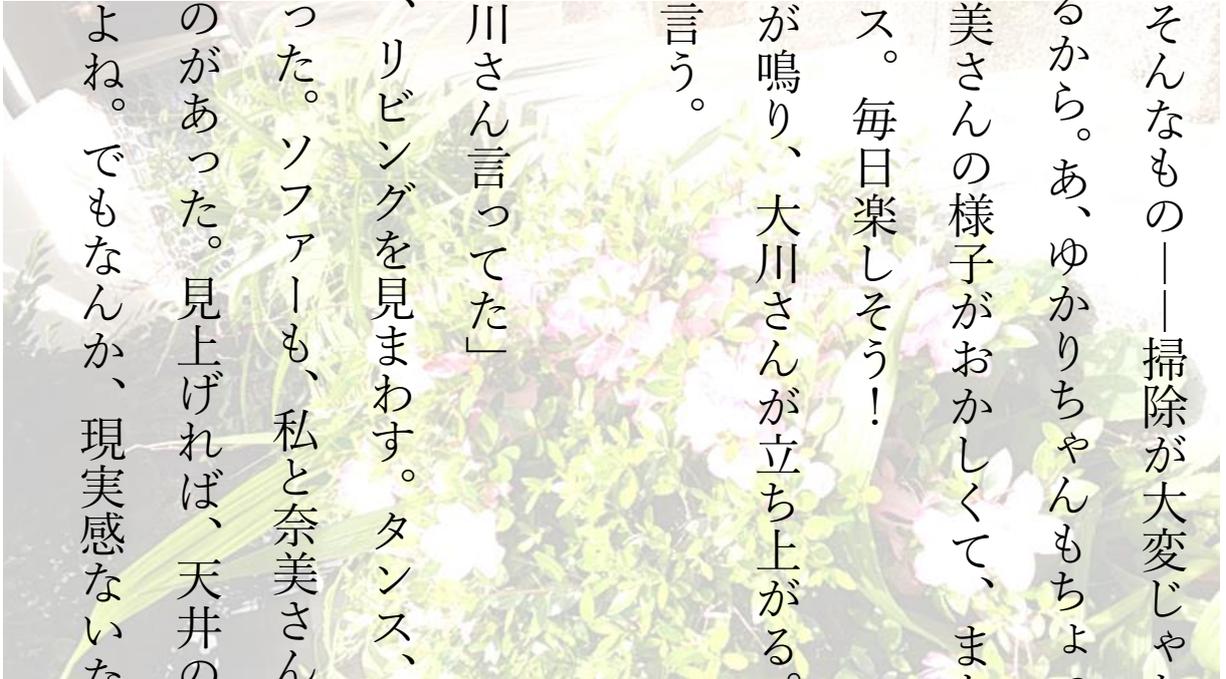
「今日届くものがあるって大川さん言ってた」

そうなんだ、と思いつつながら、リビングを見まわす。ダンス、って言っているのかわからな

いけど、家具がとても素敵だった。ソファアームも、私と奈美さんが座っていると向かい合せ

に、座り心地のよさそうなものがあつた。見上げれば、天井の明かりも風情がある。ここで

毎日過ごすかもしれないんだよね。でもなんか、現実感ないな。ぼんやりそんなことを思い



ながら眺めていたら、「ごめんね、帰らなきゃ」と、大川さんの声がした。

「何かあったんですか」奈美さんが尋ねる。

「ここに届くはずのものがひとつ、自宅に行ったみたいなの。息子から不在票があったって、今ラインが」

「えっ、じゃあ息子さんに再配達の手続きしてもらったら」

「それが、もう家を出たのよ。ちよつと荷物取りに寄っただけだからって」

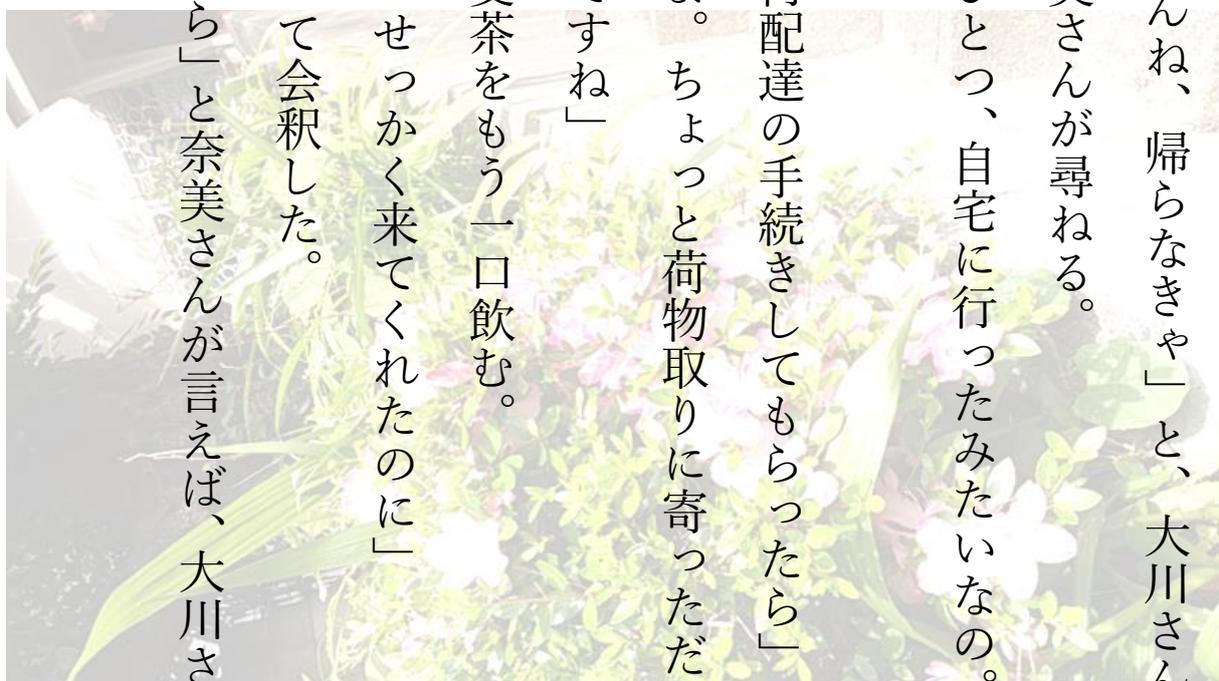
「なんか、うまくいかないですね」

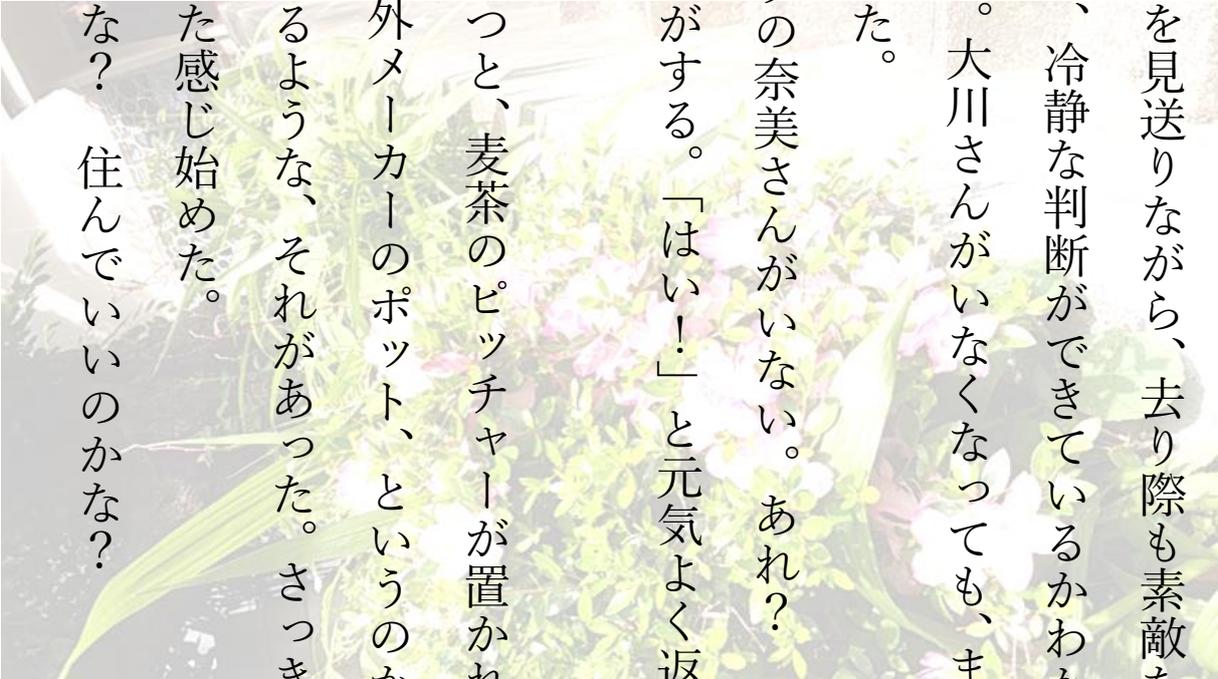
ホント、うまくいかない。麦茶をもう一口飲む。

「ゆかりちゃん、ごめんね、せつかく来てくれたのに」

「あ、いえ」私は立ち上がって会釈した。

「大丈夫、私が案内しますから」と奈美さんが言えば、大川さんはうなずき、「よろしくね」と笑顔で言った。





奈美さんと二人で大川さんを見送りながら、去り際も素敵の人だなあ、と私は思った。ちよつとポーっとしてしまつて、冷静な判断ができていくかわからない。本当に、ここに住むことにしてもいいのかな……。大川さんがいなくなつても、まだ彼女の余韻が残っているようで、玄関に立ちすくんでいた。

気がつくと、隣にいたはずの奈美さんがいない。あれ？　と思つたら、「麦茶おかわり、飲むよね？」と奈美さんの声がする。「はい！」と元気よく返事をして、ダイニングテーブルの部屋に入った。

テーブルの上にグラスが二つと、麦茶のピッチャーが置かれている。その向こうに冷蔵庫が見えて、冷蔵庫の上には海外メーカーのポット、というのか、ケトル、だったかな、電気で湯をわかして保温もできるような、それがあつた。さつき、リビングを見まわしたときに感じた、現実感の無さをまた感じ始めた。

本当に、私ここに住むのかな？　住んでいいのかな？

そんな戸惑いというか、なんというか。

奈美さんは首をかしげて見ている。昨日もあんなに話が盛り上がって、絶対ここに住むって、今日ここへ来るまで思っていたのに、なんて説明したらいいんだろう。でも奈美さんは何も言わず、グラスを私の前に差し出した。

私は会釈して、ありがとうございます、と言って麦茶を飲む。さつきほどには、のどは渴いていないみたい。

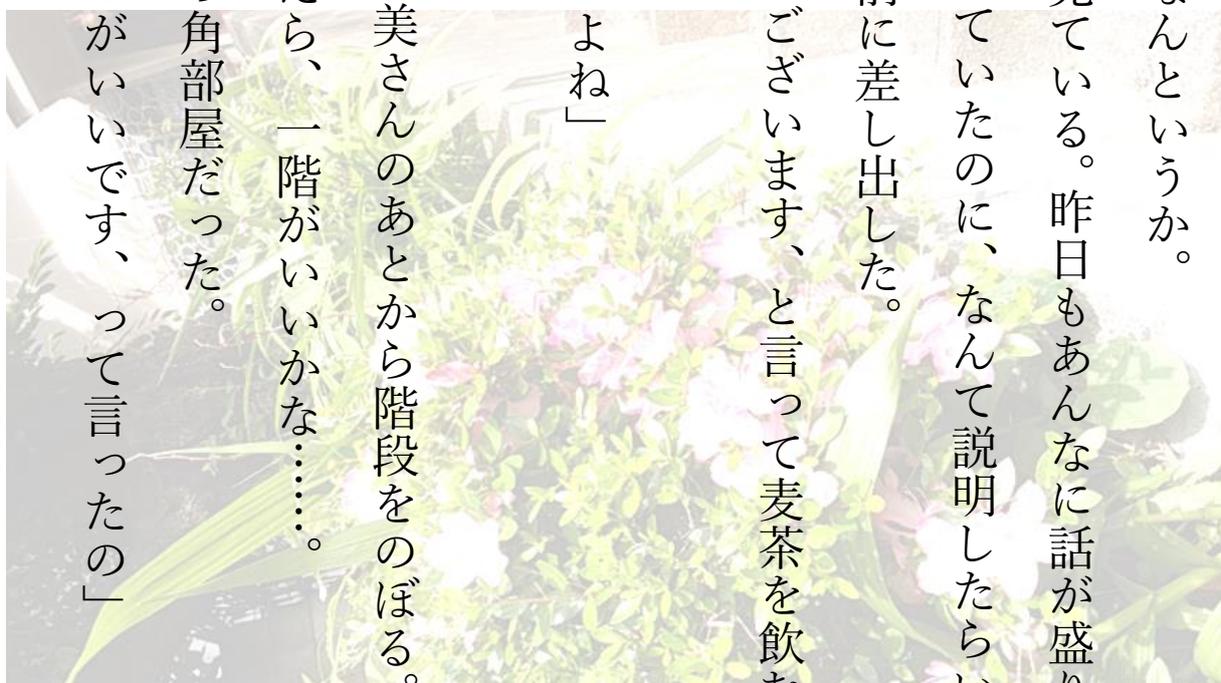
「そうだ、私の部屋、見たいよね」

「あっ、はい」

グラスをテーブルに置き、奈美さんのあとから階段をのぼる。ちよつと急な階段。上り下りが大変かも。私が住むとしたら、一階がいいかな……。

奈美さんの部屋は、二階の角部屋だった。

「私が最初だったから、ここがいいです、って言ったの」



うれしそうに言って、奈美さんはドアを開ける。天井から、welcomeという飾りがぶら下がっていた。

「うわ、やばっ」

あわてて奈美さんが取り外し、クローゼットにしまう。

「見なかったことにして、ね、お願い」

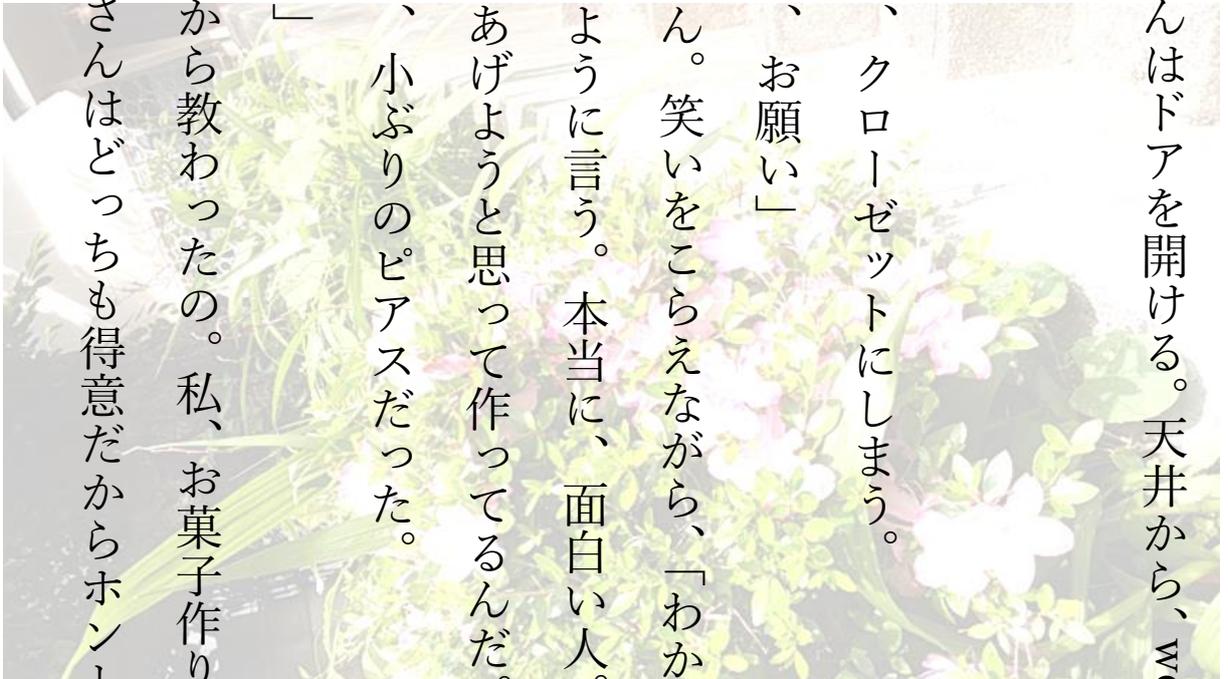
両手を合わせ懇願する奈美さん。笑いをこらえながら、「わかりました」と答えると、「よかったあ」と心から安心したように言う。本当に、面白い人。

「これもね、ゆかりちゃんにあげようと思って作ってるんだ。もうすぐ完成」

奈美さんが見せてくれたのは、小ぶりのピアスだった。

「作ってるって、もしかして」

「そう、手作り！ 大川さんから教わったの。私、お菓子作りは得意なんだけどこういうのはからっきし苦手だね、大川さんはどっちも得意だからホント助かってるの。このシェアハ



ウスにしてよかったなあって」

めまいがした。奈美さん、お菓子作りが得意なんだ……。大川さんは、アクセサリーも、お菓子も……。

「どうしたの？ 大丈夫？」

ハッと我に返ると、奈美さんが心配そうに私を見ている。

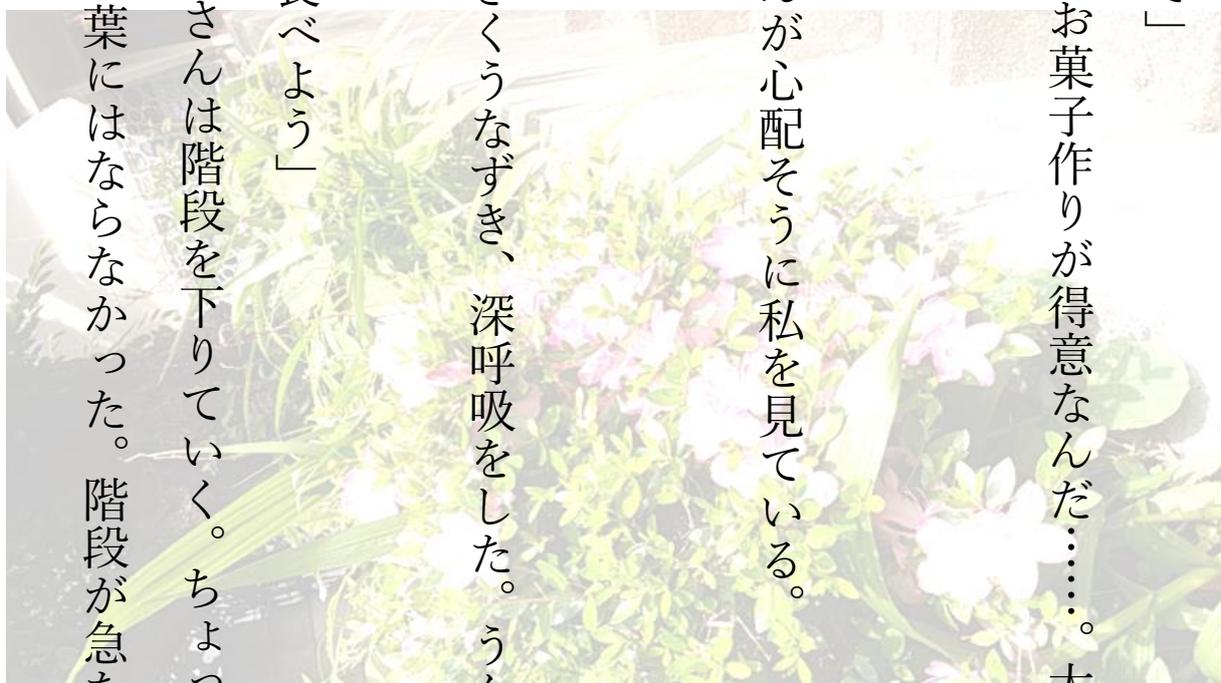
「大丈夫です。すみません」

「本当に？」

奈美さんの問いかけに大ききうなずき、深呼吸をした。うん、大丈夫。でも、やっぱりここには住めないかな……。

「ねえ、下に行ってお菓子食べよう」

えっ、と思う間もなく、奈美さんは階段を下りていく。ちよつと待ってください、と言おうとしたけど、ちゃんとした言葉にはならなかった。階段が急なのと、展開が急なのと。どっ



ちにも対応できない。でもとにかくあとに続かなきゃ。その一心で階段を下り、ダイニングテーブルまでたどり着いた。

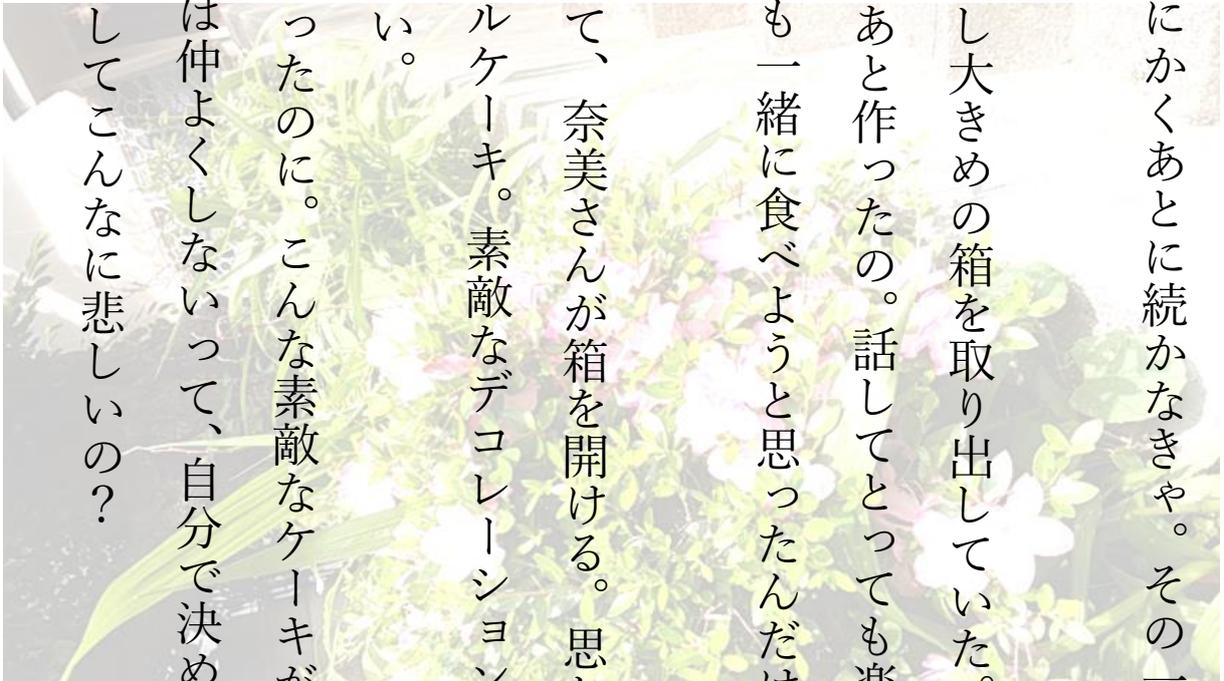
冷蔵庫から奈美さんが、少し大きめの箱を取り出していた。

「昨日ゆかりちゃんが帰ったあと作ったの。話してとっても楽しかったから、入居してくれたらいいなあって。大川さんも一緒に食べようと思ったんだけど、帰っちゃったし、いいよね」

えへへ、と子供みたいに笑って、奈美さんが箱を開ける。思わず息をのんだ。

中に入っていたのは、ホールケーキ。素敵なデコレーションケーキだった。やっぱりここは私の住むところじゃない。

あんなに話していて楽しかったのに。こんな素敵なケーキが作れて、素敵なピアスも作れる人だなんて。そういう人とは仲よくしないって、自分で決めたんでしょう？ それなのに、どうして涙が出るの？ どうしてこんなに悲しいの？



「ゆかりちゃん？ どうしたの？」

奈美さんが驚いて、私のところに来てくれた。そして背中をさすりながら、「大丈夫？」といたわってくれる。余計に涙が出てきた。やめて、そんなに優しくしないで……。

「わかった。謝る。ごめんなさい」

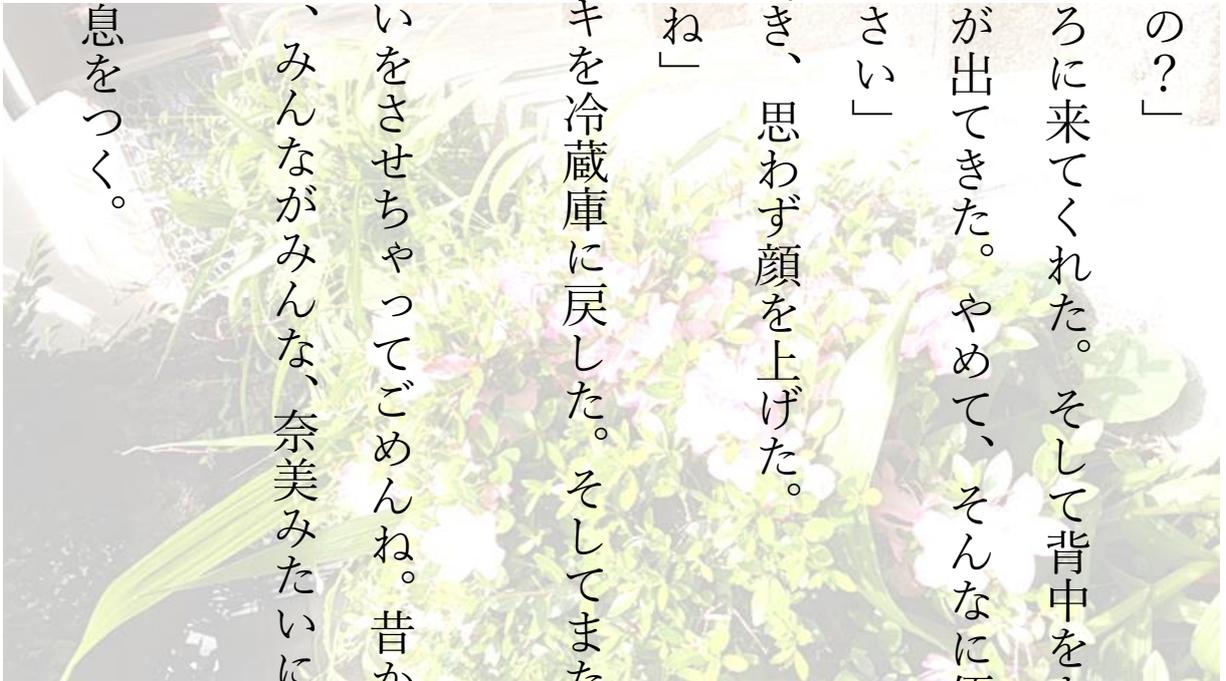
突然の言葉にこんどは私が驚き、思わず顔を上げた。

「ごめんね、ケーキはやめるね」

奈美さんは立ち上がり、ケーキを冷蔵庫に戻した。そしてまた隣に来て腰を下ろし、私の目を見て言った。

「ゆかりちゃん、不愉快な思いをさせちゃってごめんね。昔からの友達に言われてたの。シエアハウスに入ったからって、みんながみんな、奈美みたいに距離感なくても平気なわけじゃないんだからって」

奈美さんはふっと小さくため息をつく。



「そうなんだよね。私、これまでずっと、それで失敗してきた。知り合えたことがとてもうれしくて、すぐ距離を縮めたくなるの。でも、同じように考えてる人ばかりじゃないよつて。本当にそうなんだよね。わかっていたはずなのに、またやっちゃった」

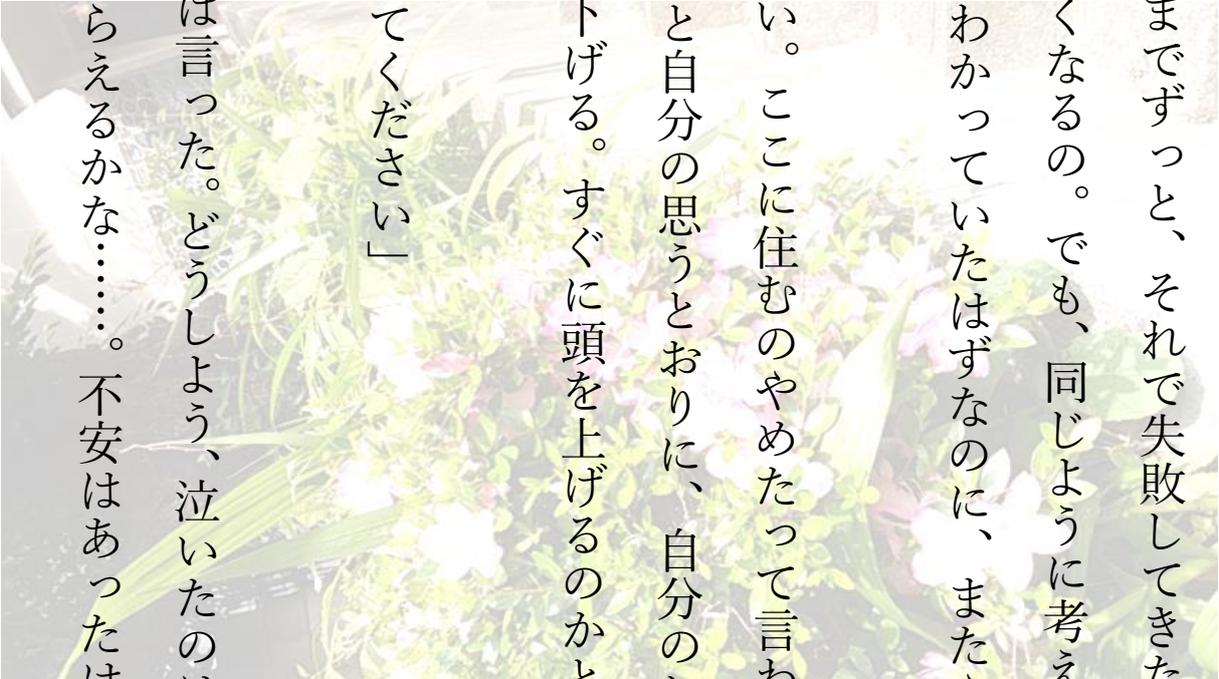
「奈美さん……」

「ほんっとーに、ごめんなさい。ここに住むのやめたって言われても怒らないから。大丈夫だから、ね。だから、ちゃんと自分の思うとおりに、自分のしたい決断をしてください」
言い終えて、奈美さんが頭を下げる。すぐに頭を上げるのかと思ったら、いつまでも頭を下げている。

「あの、奈美さん、頭を上げてください」

「まだまだ！」

頭を下げたまま、奈美さんは言った。どうしよう、泣いたのは奈美さんのせいじゃないし、でも理由を話してわかってもらえるかな……。不安はあったけど、このまま奈美さんに頭を



下げていてもらおうわけにはいかない。だから思い切って言うてみた。

「奈美さんのせいじゃないんです。全部、私のせいなんです」

「え……？」

奈美さんは顔を上げてくれた。

「どうということ？」

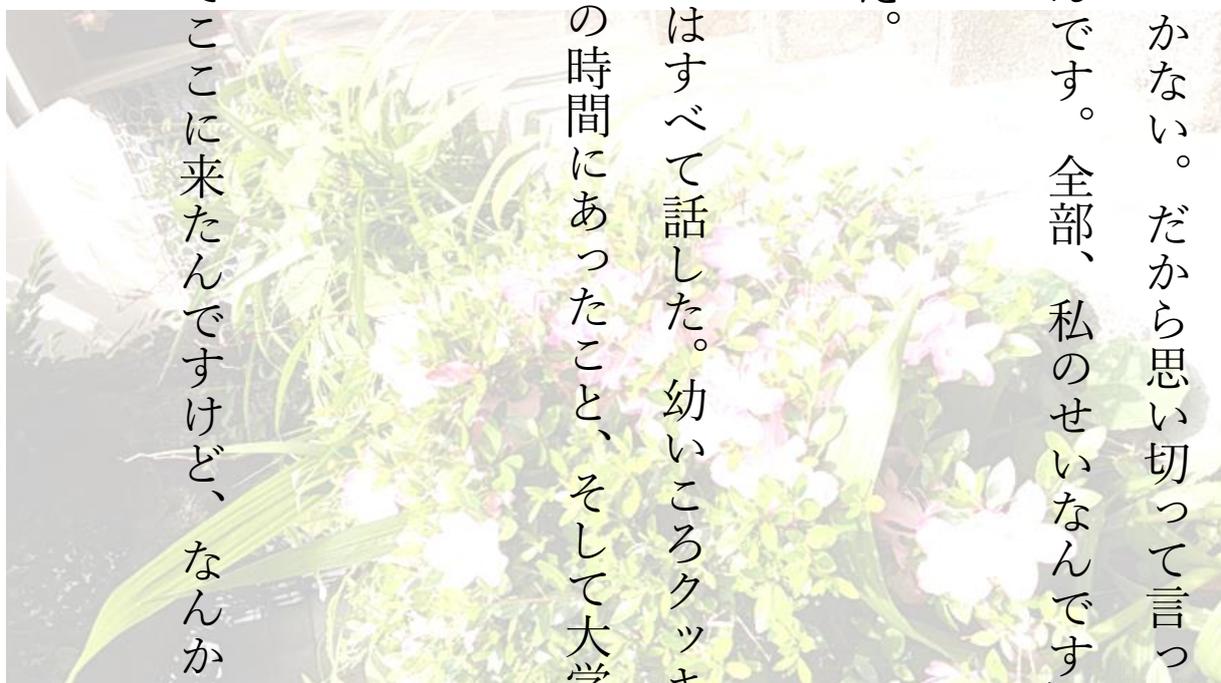
いぶかしげな奈美さんに、私はすべて話した。幼いころクッキーを作った話や、マキちゃんとの出会い、中学時代、掃除の時間にあつたこと、そして大学で、マキちゃんと再会してからのことを。

「そうだったんだ……」

私はうなずいた。

「そういう状況を変えたくてここに来たんですけど、なんか、ダメかも……」

「えっ、やっぱ私のせい？」



「違います。私自身がなんだか違和感あるというか、無理してる感じがしちゃって」
「そうかなあ、ゆかりちゃん、すごく馴染んでると思うけど」
「本当ですか？」

「うん、本当。昨日もすごく楽しそうだったし、今日あらためて思ったのは、この場所にゆかりちゃんがいるのが自然ってこと」

「えーっ？」

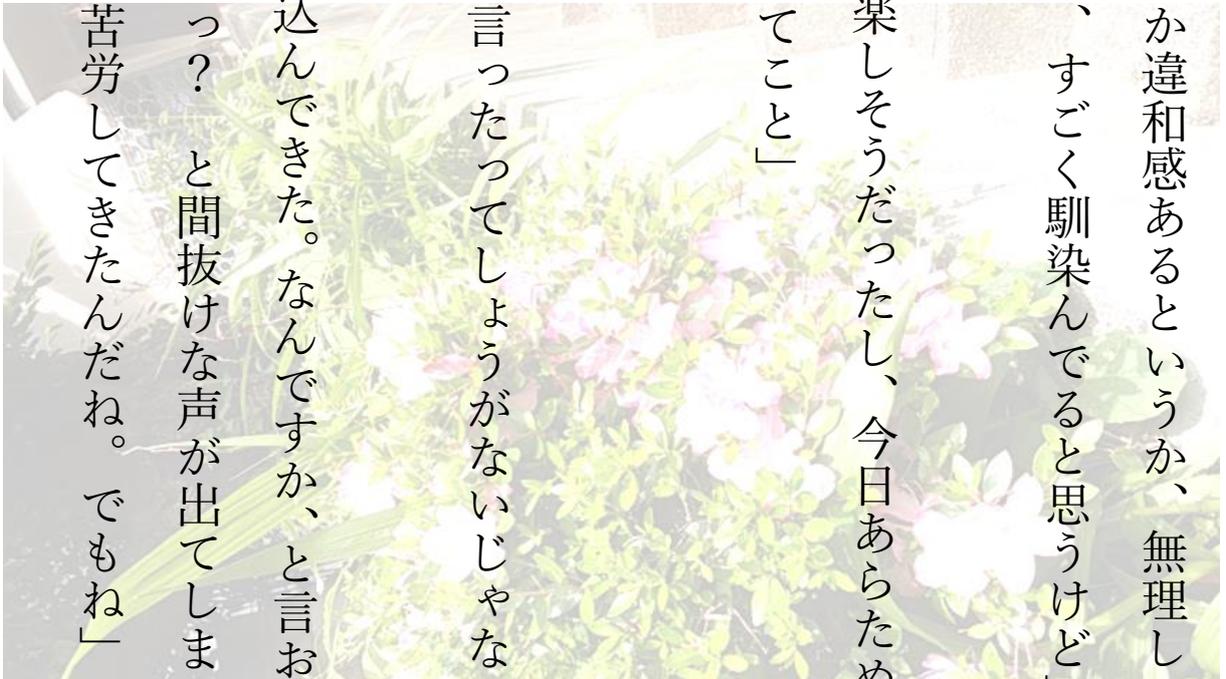
思わず声を出してしまった。

「本当よ。そんなこと、うそ言ったってしょうがないじゃない」

「それは、そうですけど」

奈美さんは、私の顔をのぞき込んできた。なんですか、と言おうとしたら、「大変だったね、ゆかりちゃん」と言われ、へっ？ と間拔けな声が出てしまった。

「大変な思いをしたんだね。苦労してきたんだね。でもね」



でもね、のところで声が大きくなった。「でも」ともう一度奈美さんが言う。

「それはみんな、終わったことなの。過ぎ去った過去。今のゆかりちゃんには、何の関係もない。だからね」

だからね、と、また声が大きくなる。「だから、難しいと思うけど、なるべく過去に影響されなくてほしい。昔のゆかりちゃんと、今のゆかりちゃんは、全然別の人だから」

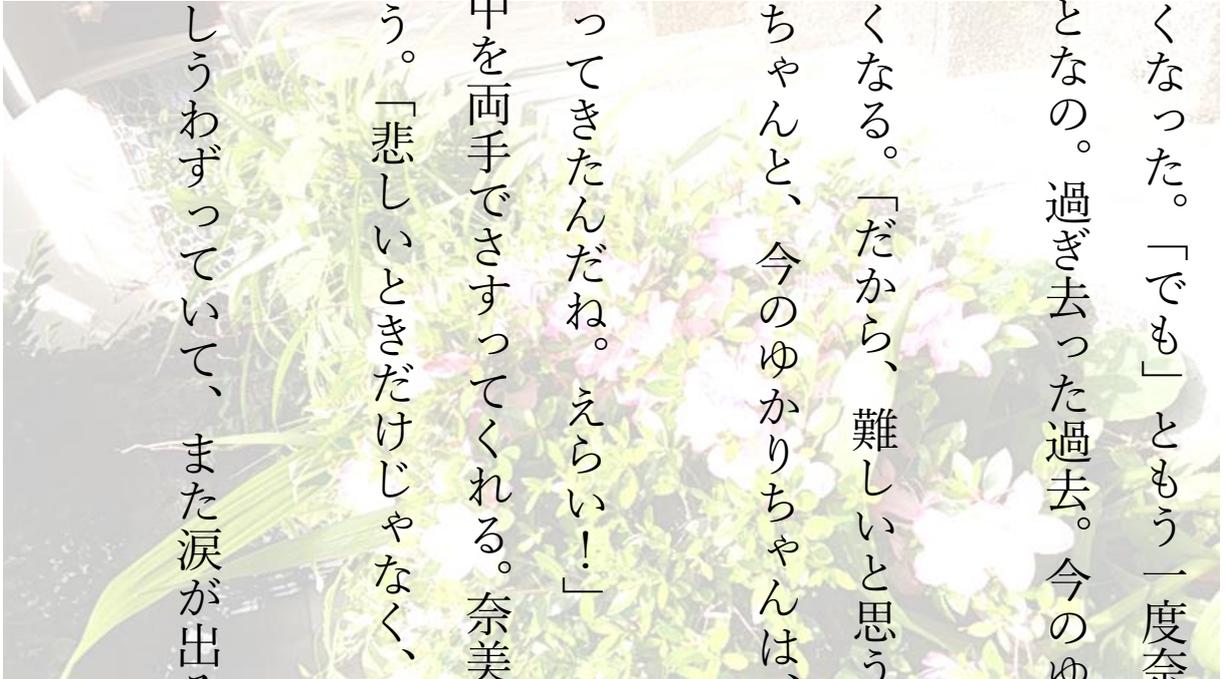
「奈美さん……」

「ゆかりちゃん、すごく頑張ってきたんだね。えらい！」

奈美さんは私を抱き寄せ、背中を両手でさすってくれる。奈美さんの手、すごくあったかい。

「涙ってさ」と奈美さんが言う。「悲しいときだけじゃなく、うれしいときにも出るんだよね」

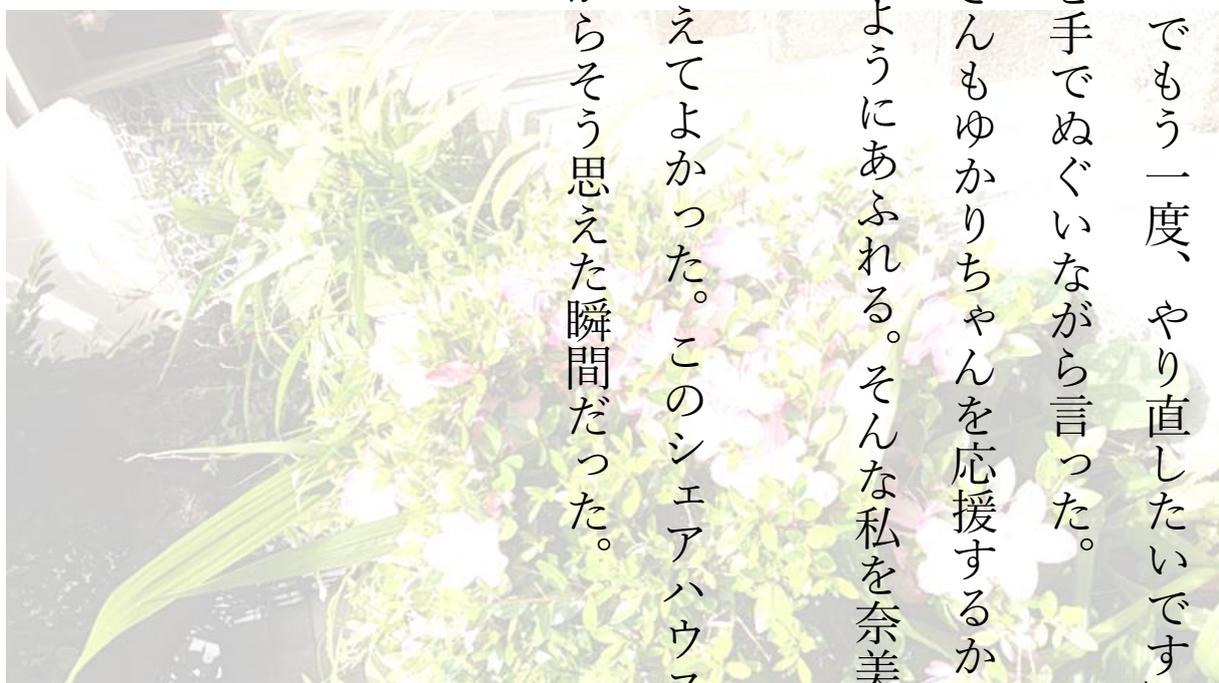
奈美さんの最後の言葉は少しうわずっていて、また涙が出そうになるのを必死にこらえ、勇気を出して宣言する。



「ここに住みたいです。ここでもう一度、やり直したいです」
奈美さんはうなずいて、涙を手でぬぐいながら言った。

「大歓迎よ！ 私も、大川さんもゆかりちゃんを応援するから。一緒に頑張ろうね」
もうダメ——。涙が洪水のようにあふれる。そんな私を奈美さんは抱きしめ、大丈夫だよ、と何度も言ってくれた。

本当に、いい人たちに出会えてよかった。このシェアハウスに来てよかった。明日からは違う人生が待っている。心からそう思えた瞬間だった。



おわり